

【げんごえもん】

「また金ちゃんの家庭に、怪獣がやってきたのでしょうか」

懐爺は平然といました。

「よくわかるのう。さすがはかいじいでござる」

ぼくは大袈裟にいました。

「なぜって、怪獣がやってくると、金ちゃんが怪獣に見えてきますから、わかるんですよ」

「かいじいは、よほど、めがわるくなったでござるか」

「いいえ、心の目で見ています」

「ものは、いいようでござるのう」

「怪獣の雰囲気というものは、怪獣鬣のひとに伝染するんですよ」

「わしが、かいじゅうびいき、というわけでござるか」

「違いますか」

「かいじゅうが、わしびいき、ということでござろう」

「ものは言い様ですね」

「いまきづいたのでござるが、かいじゅうとかいじいは、ことばが、にとりやせんか」

「似ていません。それではさようなら」

「ほこらに、きえるきでござるな。そうはさせぬ」

「もう怪獣の正体が解りましたよ。金ちゃんあんがい、影響受けやすいですねえ。それは、侍のかっこうをした【ござる】という怪獣でしょう」

「ざんねん、かねひとつ。さむらいのかっこうは、あたっとるが、【ござる】ではないでござる」

「となると、あとは、ええと、【げんごえもん】」

「おおあたりにそうろう」

「正式には、源五衛門(みなもとのごえもん)という名前ですが、いいにくいので、いつからか【げんごえもん】とよばれるようになりました」

「そうそう。【げんごえもん】も、そういつとった」

「もう喋ったのですか」

「おしゃべりな、かいじゅうにそうろう。しかも、はでなかつこうでのう。わしは、みなもとのごえもん、じゃのうて、いしかわのごえもんじゃろ、ときいたものでござる」

「あの大泥棒も、実は怪獣でして。ただ、大昔のひとには、それがわからなかった」

「となると、かまゆでなんか、へともおもわぬでござろうか」

「それはそうです。石川五衛門は、釜茹でになったと見せ掛けて、釜の底から逃げ出し、その後、太閤秀吉(たいこうひでよし)の命を奪ったのです」

「それは、しらなかつたでござるよ。おおむかしのかいじゅうは、にんげんに、き

がいをあてるのでござるか」

「実は、秀吉も怪獣で、あれは怪獣同志の闘いでした」

「むむむ、しんせつでござるのう」

「親切な新説です。新雪が積もるかもしれません」

「かいじいは、このごろ、だじゃれがおおくそうろう」

「蹠踉（そうろう）たる足取りの身ですから」

「うんざりにそうろう」

「それでは、おやすみなさい」

「【げんごえもん】は、どうするでござるか」

「金ちゃんとお喋りしたいんでしょ。わたしとお喋りする暇があったら、【げんごえもん】とお喋りしなさいな」

「かいじい、せつないこと、いうでそうろうな」

「その候は、文法上いけませんな」

「そうでそうろうかのう」

「たしかに、【げんごえもん】と、お喋りしすぎるのも問題かも」

懐爺は腕を組みました。

「もんだいで、ござるで、そうろう」

「わかりました。では明日、わたしが【げんごえもん】と会談しましょう」

「かいだんですむかのう。あいては、さむらいのかいじゅうでござるぞ。けつとうになるでござるよ」

「わたしは平和主義者です。そして侍は本来、平和主義者なのです」

「それは、しらなかつたでござる」

「ちゃんちゃんばらばらは、小説とか映画だけです。戦国時代だって、どうすれば戦争せずすむかと、思案ばかりしていたのですよ」

「ほんまかのう。そういえば【げんごえもん】も、お喋りはすきだが、けんかはきらいだ、といつとつたでござる」

「それでは明日、おやすみなさい」

ぼくは引き止めなかった。

翌朝、起きると、庭に【げんごえもん】がいない。

たぶん、早朝に、懐爺が【げんごえもん】と話をつけたのでしょ。

その日からぼくは、「そうろう」とか「ござる」とかを使わなくなりました。